

巴形銅器（ともえがたどうき）とは？



熊本市塚原歴史民俗資料館（資料所蔵館）の学芸員より

レプリカづくりに使用する鋳型（いがた）は、熊本市南区城南町の構口遺跡（かまえぐち いせき）より出土した巴形銅器（卍：マンジの形に似ている）をもとに制作（せいさく）しました。県内でも3カ所（3つ）しか発見されていない貴重（きちょう）なものです。

弥生時代（やよいじだい：およそ2500年前から1700年前までの期間）の後期、今から1800年ほど前に作られた青銅器（せいどうき）で、円形の胴体部（どうたいぶ）より8本の脚（あし）が放射状（ほうしゃじょう）に出ています（4脚、6脚、7脚などもあり）。※脚（音読み：キヤク）

緑青（ろくしょう：さび）により色が変わっていますが、その当時は光沢（こうたく：かがやき）があったはずです。出土地辺りを治（おさ）めていた「ムラ」の有力者（ゆうりよくしゃ）が所有（しよゆう）していたものと思われ、権威（けんい）のシンボルだったのでしょう。

いろいろな説（せつ）がありますが、沖縄（おきなわ）や奄美（あまみ）など、魔除け（まよけ）として家に飾（かざ）られる南海産（なんかいさん）の貝（スイジガイ：水字貝：形が漢字の「水」に似ている）を模した（まねた）ものと考えられています。